外国語活動・外国語科

榎原　朱梨・森澤　葉子・伊藤　美絵

1　研究主題との関連について

（１）「教科等本来の魅力」について

外国語科（外国語活動）の学習指導要領では，児童・生徒の発達段階に応じて少しずつ表現を変えているものの,「コミュニーションを図る（基礎となる・素地となる）資質能力を育成すること」を目指している。このことを踏まえると，外国語科における教科等本来の魅力は,「英語の言語運用能力を獲得し，コミュニケーションを図ることができるようになること」である。

本校外国語科では目指す子ども像を「目的・場面・状況に応じて，英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができる子ども」と設定している。情報化に伴い，あらゆる情報に自ら触れることが容易な現在において，英語という世界で広く使用される言語運用能力を獲得していることは，多様な媒体の情報を自分のものとして獲得していくときに，日本語で発信されたものだけに限らないさまざまな情報を得るとともに，取捨選択しながら生きていく力を身に付けることにつながる。また英語を学ぶことは，無意識的に学習していた第一言語である日本語を客観的に見る機会になり，そのことが母語をも含めた言葉によるコミュニケーション能力の向上に影響を与えると考える。このように，英語によるコミュニケーション能力を育成することは，児童・生徒の社会や世界，他者を多角的に見る態度の育成に寄与するといえるだろう。しかしながら，児童・生徒がこういった外国語科本来の魅力に迫るためには，教師の児童・生徒の実態を見極め，言語活動を設定するなど，児童・生徒に応じ，つくりかえ実践していかなければならない。教科等本来の魅力に迫る授業をつくり実現していくためには，授業者としての資質能力が求められるといえる。

（２）「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」について

英語科教員特有の資質能力として石田ら（2011）は「能力試験で測れる英語力」「英語教授に関する知識・国際理解教育に関する知識と教養」「授業で求められる資質能力」を挙げている。そのうち「能力試験で測れる英語力」と「英語教授・国際理解教育に関する知識と教養」については，授業には直接は結びつかないが,「授業で求められる資質能力」を支える資質能力であると述べている。また，卯城（2021）も，英語科教員に求められる専門性として（１）資格試験で測れる英語力だけでなく，指導者としての英語力も含めた「英語力」（２）英語科の授業を計画・実施・評価するという「英語科授業実践力」（３）英語そのものや異文化理解などといった「英語に関する専門的知識」の３つを挙げている。英語力については，卯城らも指摘しているように，資格試験で測られている英語力，つまり一般的な英語力以外にも，授業を行うにあたって児童生徒の実態に即した英語力も求められ，授業で求められる資質能力の一つと考える。

以上のことを踏まえ，本校では「一般的な英語力」「授業で求められる資質能力」「英語教授・異文化に関する知識や教養」の３つを外国語科教員に求められる資質能力と捉える。なお,「一般的な英語力」と「英語教授・異文化等に関する知識や教養」は授業に直接に関わるものではなく,「授業で求められる資質能力」を下支えするものと考える。以上のことを踏まえ，昨年度外国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力について表１の通り規定した。

表１　外国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力

資質能力	教科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・児童や生徒の興味や関心を引き出すような目標の設定 ・児童や生徒の実態に合わせ，コミュニケーションの目的・場面・状況を意識した言語活動の設定
授業実践力	・児童や生徒の実態を考慮した英語使用 ・英語を用いてコミュニケーションを図るロールモデルとしての立ち振る舞い ・安心してコミュニケーションを図れる雰囲気づくり ・児童や生徒の発話を引き出すような英語での問いかけ ・効果的な誤り訂正
授業分析・評価力	・児童や生徒の授業中の姿や振り返り等に基づく省察や授業の改善 ・ルーブリックや振り返り等に基づいた形成的評価の実施

昨年度は資質能力のうち，授業構想力の妥当性を吟味するために，児童・生徒の日常生活に基づいた単元を構想し，授業実践を行った。その結果，コミュニケーション場面を把握し，目的意識をもって取り組む姿や，与えられた課題を読み取り，自分にできることを伝えようとする姿が見られた。このことから，児童・生徒の日常生活に基づいた言語活動の場面を設定することが児童・生徒の興味や関心を引き出すことへつながり，その場面で実際に使える英語を習得することで，よりオーセンティックな英語使用へとつながったといえる。このように昨年度の研究からは，外国語科の教科等本来の魅力である「英語の言語運用能力を獲得し，コミュニケーションを図ることができるようになること」に迫るためには，「授業構想力」における「児童や生徒の興味や関心を引き出すような目標の設定」と「児童や生徒の実態に合わせ，コミュニケーションの目的・場面・状況を意識した言語活動の設定」の有効性が示唆された。本年度以降も児童・生徒の実態把握を一層行うことで，より児童・生徒が主体的にコミュニケーションを図ることができるような場面の設定や提示方法などについて引き続き検討を行っていきたい。

一方で，積極的に英語を用いて話す姿は見られるものの，適切な英語を用いて表現したい内容を伝える力は十分に身についているとは言えない現状がある。学習段階に応じて即興で伝え合う経験を繰り返し積むことで，適切な英語を用いて表現する力を育むことができるようにしていきたい。また，同時にその際に求められる教員の資質能力についての検討も必要になるだろう。

２　本年度の研究計画

（１）研究の目的

外国語科本来の魅力に迫る授業づくりにおける教員の資質能力に基づいた授業実践を行い，児童・生徒の姿からその妥当性を検証する。

（２）研究の方法

本年度の研究は次のような流れで行う。

①逆向き設計論に基づいた授業を構想・実践する。

教科等本来の魅力を踏まえた本単元における単元を貫く目標の設定や，それに迫ることができた児童・生徒の具体的な姿の想定および，児童・生徒のつまずきの予想，それに向けた手立てを検討し，授業実践を行う。

②授業実践を分析する。

実践した授業における児童・生徒の発話や振り返りシートの記述をもとに,「児童・生徒が教科等本来の魅力を踏まえた目標を達成できていたか。」について分析を行う。

（３）検証の方法

児童や生徒の変容や振り返りシート等からの授業実践の分析をもとに「外国語科本来の魅力に迫る教員の資質能力」の妥当性を吟味・検討する。

【引用・参考文献】

石田雅近・神保尚武・久村研・酒井志延（2011）『英語教師の成長‐求められる専門性』，大修館書店.
卯城祐司・樫葉みつ子（2021）『中等英語科教育』，協同出版.
金谷憲（1995）『英語教師論‐英語教師の能力・役割を科学する』，河源社.
文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語活動・外国語編』，開隆堂.